

風をよむ

No.79 2007.3.5

編集：共産主義者同盟首都圏委員会
発行：ウインドベル・ファクトリー
連絡先：新宿区西新宿 7-3-10
山京ビル503-201

定価100円

年10回刊・送料込：2,500円

郵便振替：00170-0-655767

反改憲闘争の春期大爆発を！

相模原と座間を結ぶ3.17行動「いらない！第1軍団／異議あり！米軍再編法」

日時：3月17日（土）14:00 会場：相武台1丁目公園（小田急相武台前駅徒歩10分）他
主催：神奈川平和運動センター（TEL:045-778-9880）他

3.19改憲阻止・院内決起集会

日時：3月19日（月）14:00～ ※3.20～ハンスト突入 会場：衆院第2議員会館4会議室
主催：9条改憲阻止の会（TEL：03-5368-8196）

【M&R研究会公開フォーラム】

グラムシ『獄中ノート』におけるヘーゲル「法」哲学の変奏

論者：中村勝己さん（フリーター/イタリア政治思想史研究）

日時：3月31日（土）14:00～18:00 会場：中央大学駿河台記念館680号室
主催：MR研（TEL：03-3264-2735）

**安倍・自公反動政権打倒！ 右翼・石原を都政から追放せよ！
卒・入学式における「日の丸・君が代」強制反対に結集しよう！**

四月統一地方選挙、七月参院選挙を控えて、安倍・自公政権の支持率は急速に低下しつつある。閣僚の暴言の類について、ここでは繰り返さない。小泉「改革」を引き継ぐと称して、派手に打ち上げた九条改憲、教育改革、労働ビッグバン、米軍追隨の軍制改革（防衛省発足など）、反動イデオロギーの過剰さと、社会経済の現実性の欠如、浮き足立った右傾化の浅はかさが誰の目にも明らかになりつつある。しかし、一度広言した反動的公約を撤回することはできない。人気回復のために、ますます反北朝鮮の排外主義・ナシヨナリズムに頼ることになる。これが、アジアにおける外交放棄、孤立化を深めることになることは明らかだ。

二月二八日には、上海市場に始まる世界同時株安が起きた。利ざやを求めて世界市場を駆け巡るマネー経済の虚構性はまたしても明らかになった。野宿者を公園から叩き出し、釜が崎労働者の住民登録の権利を奪い、銀行をはじめとする大資本救済のために、億兆の国民から搾り取った税金をつぎ込んで手厚く救済し、マネー取引であぶく銭をかき集める風潮を礼賛し、労働者の社会的権利を剥奪して長時間残業・過労死、首切り自由を推進し、住民の生存を否定する福祉切捨てを行いながら、「美しい国」などと嘯くブルジョア政治家の感性が、社会的格差の露出に從って国民の批判を浴びつつある。

現在の通常国会では、教育基本法改悪を引き継いで、教員免許法、学校教育法、地方教育行政法が改悪されようとしている。またもな歴史・社会教育と、個人の思想信条の尊厳を守って「不起立」を闘った教育労働者に大量処分を行う一方で、学校教育における差別・選別、規律訓練強化、体罰容認、詰め込み教育復活、資本と国家に服従しない教育労働者・労組の排除が進められようとしている。

三・四月期の卒・入学式の時期には、東京都・石原のお先棒を担ぐ都教委との闘いをはじめ、全国で「日の丸・君が代」不従服の闘いが行われようとしている。これは、教育労働者、学生、児童・生徒の権利を守る闘いでもあると共に、学校教育における資本攻勢から、社会そのものを防衛する闘いである。二八年闘い、ついに完全勝利を収めた、郵政4・28裁判、そして近年の闘う教育労働者への処分をはねかえす闘いを進め、三・四月、反改憲闘争と呼応した労働攻勢に結集しよう。都政を私物化し、教員処分を乱発しつつける、差別・排外主義右翼・石原を追放しよう！

教育基本法改悪弾劾

もし教育改革と言いたいのならば、資本主義の廃棄こそ求められる！

国家が前面に躍り出てくる領域としての「教育」

子どもの公共心の希薄化、少年犯罪の凶悪化、ゆとり教育の下での「学力低下」、「学級崩壊」、そして相継ぐ「いじめ」による自殺等々、教育現場における問題は山積し、これに解決をもちたらずことを政策の重要課題とする安倍政権は、これらの問題を「口実」にして、昨年十二月十五日改悪教育基本法を強行採決した。

この改悪教育基本法で最も注目されたのは、「愛国心」という言葉に象徴される国粹主義的な教育へと大きく舵を切ったところである。政府は教育の目標として、公共精神の重視、伝統文化の尊重、国を愛する心の涵養等を盛り込み、「愛国心」を通じて、「正常」から逸脱したとされている現代の子どもたちを矯正し、規範意識を植えつけようとしているのだ。まさに「愛国心」は、学級崩壊もいじめも少年犯罪もすべて解決してしまう万能薬として主張されている。しかし国民の大半が、国家の具体像を持っていないところで、「愛国心」を持ってと言われても持つことなどできるわけがないと考えられているという事実に加え、「愛国心」で「いじめ」や「少年犯罪」等の問題が解決されるなどは誰

も信じていない。

確かに政府の愚策を嘲笑するのは容易い。あるいはいくら政府が息巻いて国家イデオロギーで人々を洗脳しようとしても、現代に生きる人々がそのような空疎なイデオロギーを受け入れることは現状では不可能だ。しかしここで気をつけなければならぬ。

国家の存続には国民の再生産、とりわけ国家に忠誠を誓う国民の再生産なくしては成し遂げられない。この国民の再生産を担うのが国家のイデオロギー装置であり、その代表が学校である。学校の存在が未来の国家存続の要となる。そうであるがゆえに、教育という領域には国家が介入し、前面に現れ出るのである。確かに国家は普段では可視化できない。しかし、ときに軍隊や警察などの暴力装置となって具体的な姿をもって可視化されるように、教育という領域において露出する。今回の教育基本法改悪という事態はまさに顕著な例である。

今、学校で何が行なわれているのか

学校では何が行なわれているのか。言うまでもなく様々な教科が教えられる。しかしそれと同時に

あるのかはどうでもよく、事実として参拝を繰り返したことは国の内外の人々から見れば立派なナショナリストの姿として映る。あるいは第二次世界大戦中の日本人々が当初心の底から天皇主義者であったかどうかも疑わしい。しかし彼（女）らは振舞としては天皇主義者であり、事実天皇主義者として機能した。イデオロギーはその人の信念・信条というような心の問題ではなく、振舞によって根づき、表出するのだ。

その顕著な例がとりわけ石原都政で推進されている「日の丸」「君が代」の強制である。まさに「起立」や「斉唱」などという身体的振舞を問題にしようとしているのだ。日の丸を掲げ、君が代を歌えば、国粹主義的な信条を持つていようがいまいが、外から見れば立派な国粹主義者である。そして身体運動を反復していけば、精神的にも国粹主義者となるであろう。そのとき同時に、日の丸・君が代を拒否する教職員に対する容赦のない暴力が猛威を振るい、弾圧と排除が行なわれる。子どもたちは見ている。これを「いじめ」と言わずして何であるろう。異端者（とされてしまう者たち）を抑圧排除する国家と体制に追従する者たちの姿を真似して、子どもたちは「いじめ」を実践する。

すでに現行の学習指導要領などで先取りされて、今後「態度の評価」というかたちで推進されていくことが予想される。また教科書にも「愛国心」に関する記述も増え、愛国心を伝えていくための研修も強化される。子どもに対する家庭も地域も巻き込んだ全包的な教育、逃げ道のない国家管

に、あるいはそれを通して、規律訓練（＝規格化）も行なわれる。

まず、様々な教科において学ばれる内容は、現行の資本主義体制の中で必要とされるものにそって編成され、結果、それは資本主義体制に奉仕するものとなる。その一方で、学生も親も良い学校に行き、最終的には良い企業に就職することを望み、その達成を学校に期待し、学校もそのニーズに応えようとする。両者が共犯的に体制の思惑を推進することになる。しかし、ただ勉強ができるだけの人間では良質な労働力商品（資本の側から見れば利潤を生み出し、問題を起こさない人材、労働者の側から見れば、良い会社に就職し、出世し、あるいはクビにならない人材、等々）にならない。規範意識が必要なのだ。それぞれの職種に応じた知識を持った上で、その知識を利潤拡大のために使用し、勤勉に働く「道徳」を身に付けさせなければならぬ。「学力低下」は、技術立国日本にとっては痛手である。資源はないが加工技術と勤勉さで世界をリードしていたと自負する資本の側の幻想を傷つけるものとなる。やはりそこにおいて労働者の規範意識、勤勉さと誠実さが必要とされる。ここで活躍するのが、ブルジョアジ―と結託した、あるいはブルジョアジ―の代表者

教育基本法改悪と軌を一にした防衛「省」昇格

現在、安倍政権は戦争のできる国づくりを着々と整えている。奇しくも改悪教育基本法が強行採決された日に、防衛庁は「省」に格上げされた。愛国心が即戦争に繋がるのではない。国民がバラバラになり、国民の間に不信感が渦巻く中、それを解消する一番の手立ては戦争である。米国がよくとる手段である。戦争によって国民を一つにまとめるのだ。そのとき愛国心が威力を発揮する。戦争を起こしたときこそ、愛国心が要請される。そのための準備が今着々と進められているのだ。いじめ問題などは、まさに「口実」にすぎない。政府の真の狙いは愛国心の徹底である。支配階級にとって教基法改悪＝教育の支配統制＝愛国心の注入鼓吹とは、改憲を見据えた戦争のため、戦争を担う兵士づくりのためののだ。

それゆえ、学校は階級闘争の場となる。各地で政府の主導する「教育改革」に反対し、「君が代」「日の丸」を拒否し身を挺して闘う教職員が多くなる。また、政府のあまりにも愚かな政策に翻弄さ

たちが動かす国家によって照射される国家イデオロギー、すなわちなショナリズムである。

本来前近代的なナショナリズムと近代的であるどころか超近代的なものへと発展する余地のある資本主義は対立するものであるが、昨今のグローバリゼーションの発展の中でも一度ナショナリズムの登場が要請されている。賃金格差を利用した企業の海外進出は、賃金格差が徐々になくなりつつある現状の中では以前ほど有利さをつくり出さなくなっている。そのときこれまで弾き飛ばされてきた「二一ト」が注目される。労働市場の外部にあった「二一ト」を吸収し、労働力商品と化すことが目論まれる。あるいは海外進出した場合でも、日本の労働者が自分を単なる資本の歯車とみなすしかない虚しさから解放させてあげるために、日本のために仕事をする自分というアイデンティティを持たせた方が効率良く働かせることができる。このような資本の側の理由から、新たなナショナリズムが要請されている。

振舞によって根付かされ表出するイデオロギーとしての「愛国心」

確かに現代の日本人にとって「愛国心」などナシセンスである。しかし国家イデオロギーは、信奉してはなくても、人々の中に根づく。身体の規律訓練、あるいは振舞を通して根づくのである。例えば、小泉前首相は、靖国神社参拝に固執した。しかし、彼がどれくらい信念をもって参拝を行なったのか。だが、彼が生粋のナショナリストで

れ、身も心もさらに荒廃させていく子どもたちが叫びを上げている。もし本気で「いじめ」をなくしたいのなら、体制変革しかないのだ。まさに資本主義はその内部に「弱肉強食」＝「いじめ」の要素を宿し、それによって推進される。子どもた

ちは大人たちから教わる資本主義的な振る舞いを素直に表出しているにすぎない。それゆえ、資本主義が続く限り「いじめ」はなくなるならぬだろう。だから、革命なのだ。真の教育改革を為し遂げるには、体制変革しかない。

教育現場の闘う教職員はもとより、地域にも闘争の場が拡大している。戦争準備・改憲攻撃と対決し、闘いの連帯の絆を創り出していかなくてはならない。いざともに闘わん！

コラム

映評・「幽閉者（テロリスト）」（脚本・監督足立正生）

「現実」に波及する かすかな可能性

赤軍派や岡本公三、そして足立正生監督などの実態や行動、そしてその思想を詳しくは知らない。さらにいえば映画一般にも明るくはない。

映画「幽閉者（テロリスト）」（脚本・監督足立正生）はリッダ闘争（1971年イスラエル）の参加者

の現実のなかでいかように形成され貫徹されるかは圧巻であり感動的である。

しかし、2007年現在、遠くパレスチナの地で、まだ実現しない民族の自決、そして共生（※注1）をもとめる広範な運動が国際世論とともに展開されていることはこの日本の地で生きる私のもとにも情報として伝わってくる。わたしはそのような動きを断固として支持する一人である。と同時に、アメリカ合衆国がパ

レスタナの民族自決に鋭く敵対し、有形無形の圧力を加えつづけ、さらにわが日本もアメリカに追随しパレスチナ人民の民族自決運動に敵対（自覚されていないという意味ではアメリカよりもタチが悪い）していることに抗議する。

映画をながしかの手段としてのみではなく独立したひとつの表現ジャンルとして価値を見出しつつ、現実の政治との緊張関係のなかでいかに可能性を追求するか、わたしはこれが映画にかかわらず表現の一つの醍醐味であると考えのだが、この映画は最近の映画のなかでは奇跡的にそのような営為に挑戦していたように思える。政治の観念化と観念の政治化、その両方への批判的な視座が切り開く表現の持つ爆発的な可能性、それは映画のもつ本来の可能性があります。人間の生の欠かすべからざる表現としての運動がもつべき可能性そのものに他ならない。やられた。と同時に、さまざまな評価が交錯

しながら、総体としては「過去」の出来事とされている日本におけるパレスチナ問題ならびにそれと日本との様々な関わり。それとどう切り結ぶのか、一つの映画で全てを扱うことはむろん困難であり、また現代史の複雑なねじれと日本の反動化のなかでその作業はますます難しくなっていると感じるのだが、それゆえ重要な課題として前景化していると感じた。しかし今そのことは問わない。「現実」の「政治」のなかでこそ問われなければならないからだ。

なんだか最後は安っぽいアジ調になつてしまつたが、映画という現実現実社会のなかで様々な機能している映画のなかで、自身の機能にたいしこれほど批評的な作品は滅多にない。そしてそれが映画以外の現実にも波及させられるかすかな可能性を感じる事ができた。収穫だった。（註1）1988年、PLOは多民族国家の建設を路線として採用した。

（K・T）

わしき架空の人物がMの妄想（？）として出てきて対話したり、Mの過去、とくに家族関係と思春期の女性への憧憬（？）などが重なりながら進行する。徹底的に個人を対象にした映画だ。そして拷問のなかで、いかに自分の信念を貫くかが描かれている。とくに信念が拷問という極限

ある。

同時に、さまざまな評価が交錯